

ヨブ記

第一章 ウツの地にヨブと名くる人あり其人と爲完全かつ正くして神を畏れ惡に遠ざかるニその生る者は男の者七人女の者三人三その所有物は羊七千 駱駝三千 牛五百 軛 牝驢馬五百 僕も夥多しあり此人は東の人の中にても最大なる者なり四その子等おのおの己の家にて己の日に宴筵を設くる事を爲しその三人の姉妹をも招きて與に食飲せしむ五その宴筵の日はつる毎にヨブかならず彼らを召よせて潔む 即ち朝はやく興き彼ら一切の數にしたがひて燔祭を獻ぐ是はヨブ我子ら罪を犯し心を神を忘れたらんも知べからずと謂てなりヨブの爲とて常は是のごとし六或日神の子等きたりてエホバの前に立つサタンも來りてその中にあり七エホバ、サタンに言たまひけるは汝何處より來りしやサタン、エホバに應へて言けるは地を行めぐり此彼經あるきて來れりハエホバ、サタンに言たまひけるは汝心をもちひてわが僕ヨブを觀しや彼ののごとく完全かつ正くして神を畏れ惡に遠ざかる人世にあらざるなり九サタン、エホバに應へて言けるはヨブあにもとむることなくして神を畏れんや一〇汝彼とその家およびその一切の所有物の周圍に藩屏を設けたまふにあらざるや 汝かれが手に爲とてところを盡く成就せしむるがゆゑにその所有物地に遍ねし二然ど汝の手を伸て彼は一切の所有物を撃たまへ 然ば必ず汝の面にむかひて汝を誑はん三

エホバ、サタンに言たまひけるは視よ彼の一切の所有物を汝の手に任す 唯かれの身に汝の手をつくる勿れサタンすなはちエホバの前よりいでゆけり三或日ヨブの子女等その第一の兄の家にて物食ひ酒飲あたる時四使者ヨブの許に來りて言ふ牛耕しをり牝驢馬その傍に草食をりしに五シバ人襲ひて之を奪ひ刃をもて少者を打殺せり我ただ一人のがれて汝に告んて來れりと六彼なほ語ひをる中に又一人きたりて言ふ神の火天より降りて羊および少者を焚て滅ぼせり我ただ一人のがれて汝に告んとて來れりと七彼なほ語ひをる中に又一人きたりて言ふカルデヤ人三隊に分れ來て駱駝を襲ひてこれを奪ひ刃をもて少者を打殺せり我ただ一人のがれて汝に告んとて來れりと八彼なほ語ひをる中に又一人來りて言ふ汝の子女等その第一の兄の家にて物食ひ酒飲をりしに九荒野の方より大風ふき來て家の四隅を撃ければ夫の若き人々の上に潰れおちて皆しねり我これを汝に告んとて只一人のがれ來れりと一〇是においてヨブ起あがり外衣を裂き髪を斬り地に伏して拜し二言ふ我裸にて母の胎を出たり又裸にて彼處に歸らんエホバ與へエホバ取たまふなりエホバの御名は讚べきかな三この事においてヨブは全く罪を犯さず神にむかひて愚なることを言ざりき第二章 或日神の子等きたりてエホバの前に立つサタンも來りその中にありてエホバの前に立つ三エホバ、サタンに言たまひけるは汝何處より來りしやサタン、エホバに應へて言けるは地

を行めぐり此彼經あるきて來れり三エホバ、サタンに言たまひけるは汝心をもちひて我僕ヨブを見しや彼のこゝく完全かつ正しくして神を畏れ惡に遠ざかる人世にあらざるなり汝われを勤めて故なきに彼を打惱さしめしかど彼なほ己を完うして自ら堅くす四サタン、エホバに應へて言けるは皮をもて皮に換るなれば人はその一切の所有物をもて己の生命に換ふべし五然ど今なんぢの手を伸て彼の骨と肉とを撃たまへ然は必ず汝の面にむかひて汝を誑はん六エホバ、サタンに言たまひけるは彼を汝の手に任す只かれの生命を害ふ勿れと七サタンやがてエホバの前よりいでゆきヨブを撃てその足の跣より頂までに惡き腫物を生せしむ八ヨブ土瓦の碎片を取り其をもて身を掻き灰の中に坐りぬ九時にその妻かれに言けるは汝は尚も己を完たうして自ら堅くするや神を誑ひて死るに如すと一〇然るに彼はこれに言ふ汝の言ところは愚なる婦の言とるに似たり我ら神より福祉を受けるなれば災禍をも亦受ざるを得んやと此事においてはヨブまつたくその唇をもて罪を犯さざりき一時にヨブの三人の友この一切の災禍の彼に臨めるを聞き各々おのれの處よりして來れり即ちテマン人エリバズ、シユヒビルダデおよびマアナゾバル是なり彼らヨブを弔りかつ慰めんとて互に約してきたりしが二目を擧て遙に觀しに其ヨブなるを見識がたき程なりければ齊く聲を擧て泣き各おのれの外衣を裂き天にむかひて塵を撒て己の頭の上にちらし三乃ち七日七夜かれと

偕に地に坐しめて一言も彼に言かくる者なかりき彼が苦惱の甚だ大なるを見たればなり
第三章一斯て後ヨブ口を啓きて自己の日を詠へり二ヨブすなはち言詞を出して云く三我が生れし日亡びうせよ男子胎にやどれりと申し夜も亦然あれ四その日は暗くなれ神上よりこれを顧みたまはざれ五光これを照す勿れ六暗闇および死蔭これを取もどせ七雲これが上をおほえ日を暗くする者これを懼しめよ六その夜は黑暗の執ふる所となれ年の日の中に加はらざれ月の數に入ざれ七その夜は孕むこと有ざれ歡喜の聲その中に興らざれ八日を詠ふ者レビヤタンを激發すに巧なる者これを詠へ九その夜の晨星は暗かれその夜には光明を望むも得ざらしめ又東雲の眼蓋を見ざらしめよ一〇是は我母の胎の戸を闔すまた我目に憂を見ること無らしめざりしによる一何とて我は胎より死て出ざりしや何とて胎より出し時に氣息たえざりしや二如何なれば膝ありてわれを接しや如何なれば乳房ありてわれを養ひしや三否らずば今は我偃て安んじかつ眠らん然ばこの身やすらひをり二四かの荒墟を自己のために築きたりし世の君等臣等と偕にあり一五かの黄金をもち白銀を家に充したりし牧伯等と偕にあらん一六又人しれず墮る胎兒のごとくにして世に出ずまた光を見ざる赤子のごとくならん一七彼處にては惡き者虐遇を息め倦憊たる者安息を得一八彼處にては俘囚人みな共に安然に居りて驅使者の聲を聞ず一九小き者も大なる者も同じく彼處にあ

り僕も主の手を離る二〇如何なれば艱難に在る者に光を賜ひ心苦しむ者に生命をたまひしや二三斯る者は死を望むなれどもきたらずこれをもとむるは藏れたる寶を掘るよりも甚だし三もし墳墓を尋ねて獲ば大に喜び樂しむなり四その道かくれ神に取籠られを人に如何なれば光明を賜ふや二四わが歎息はわが食物に代り我呻吟は水の流れそそくに似たり二五我が戦慄き懼れし者我に臨み我が怖懼れたる者この身に及べり二六我は安然ならず穩ならず安息を得ず唯艱難のみきたる

第四章 時にテマン人エリバズ答へて曰く二人もし汝にむかひて言詞を出さば汝これを厭ふや然ながら誰か言で忍ぶことを得んや三さきに汝は衆多の人を誨へ諭せり手の垂たる者をばこれを強くし四つまづく者をば言をもて扶けおこし膝の弱りたる者を強くせり五然るに今この事汝に臨めば汝悶えこの事なんぢに加はれば汝おぢまどふ六汝は神を畏こめり是なんぢの依頼む所ならずや汝はその道を全うせり是なんぢの望ならずや七請ふ想ひ見よ誰か罪なくして亡びし者あらん 義者の絶れし事いづくに在や八我の觀る所によれば不義を耕へし惡を播く者はその穫る所も亦是のごとし九みな神の氣吹によりて滅びその鼻の息によりて消つす一〇獅子の吼猛き獅子の聲とともに息み少き獅子の牙折れ二大獅子獲物なくして亡び小獅子散失す二二前に言の密に我に臨めるありて我その細聲を耳に聞得たり一三即ち人の熟睡する頃我夜の異象によりて想ひ煩ひをりける時

一四身に恐懼をもよほして戦慄き骨節ごとく振ふ二五時に靈ありて我面の前を過ければ我は身の毛よだちたり二六その物立とまりしが我はその状を見わかつことえざりき唯一の物の象わが目の前にあり時に我しづかなる聲を聞けり云く七人いかに神より正義からんや人いかにその造主より潔からんや八彼はその僕をさへに恃みたまはず 其使者をも足ぬ者と見做たまふ一九況んや土の家に住をりて塵を基とし蜉蝣のごとく亡ぶる者をや二〇是は朝より夕までの間に亡びかへりみる者もなくして永く失逝る二一その魂の緒めに絶ざらんや皆悟ること無しして死す

第五章 請ふなんぢ顛びて看よ誰か汝に應ふる者ありや 聖者の中に誰に汝むかはんとするや二夫愚なる者は憤恨のため身を殺し 癡き者は嫉妬のために己を死しむ三我みづから愚なる者のその根を張るを見たりしがすみやかにその家を誣へり四その子等は助援を獲ることなく 門にて惱まざる之を救ふ者なし五その櫓とれる物は饑たる人これを食べ 荆棘の籬の中ありてもなほ之を奪ひいだし 絹をその所有物にむかひて口を張る六災禍は塵より起らず 艱難は土より出でて七人の生れて艱難をつくるは火の子の上に飛がごとし八もし我ならんには我は必らず神に告求め 我事を神に任せん九神は大にして測りがたき事を行ひたまふ 其不思議なる事を爲たまふこと數しれず一〇雨を地の上に降し 水を野に遣り二卑き者を高く擧げ憂ふる者を引興

して幸福ならしめたまふ二神は狡しき者の謀計を敗り之をして何事をもその手に成就ること能はざらしめ三慧き者をその自分の詭計によりて執へ 邪なる者の謀計をして敗れしむ四彼らは晝も暗黒に遇ひ 卓午にも夜の如くに摸り惑はん五神は惱める者を救ひてかれらが口の劍を免かれしめ 強き者の手を免かれしめたまふ一六是をもて弱き者望あり 惡き者口を閉じ七神の懲したまふ人は幸福なり 然ば汝全能者の傲責を輕んずる勿れ一八神は傷け又裏み 撃ていたため又その手をもて善醫したまふ一九彼はなんぢを六の艱難の中にて救ひたまふ 七の中にても災禍なんぢにのぞまじ二〇饑饉の時にはなんぢを救ひて死を免れしめ 戰爭の時には劍の手を免れしめたまふ二一汝は舌にて鞭たる時にも隠ることを得 壊滅の來る時にも懼ること有じ二三汝は壊滅と饑饉を笑ひ 地の獸なんぢと和がん二四汝はおのが田野の石なんぢと相結び 野の獸なんぢと和がん二五汝はおのが幕屋の安然なるを知ん 汝の住處を見まはるに缺たる者ならん二六汝また汝の子等の多くなり 汝の裔の地の草の如くになるを知ん二七汝は遐齡におよびて墓にいらん 宛然麥束を時にいたりて運びあぐるごとくなるべし二七視よ我らが尋ね明めし所かくのごとし 汝これを聽て自ら知れよ

第六章 ヨブ應へて曰く二願はくは我憤恨の善く權られ 我懊惱の之とむかひて天秤に懸られんことを三然すれば是は海の沙よりも重からん 斯ればこそ我言躁妄なりけれ四それ全能者

の箭わが身にいりわが魂神その毒を飲り 神の畏怖我を襲ひ攻む五野驢馬あに青草あるに鳴んや 牛あに食物あるに哞らんや六淡き物あに鹽なくして食はれんや 蛋の白あに味あらんや七わが心の觸ることを嫌ふ物 是は我が厭ふ所の食物のごとし八願はくは我求むる所を得んことを願はくは神わが希ふ所の物を我に賜はらんことを九願はくは神われを滅ぼすを善とし 御手を伸て我を絶たまはんことを一〇然るとも我は尚みづから慰むる所あり 烈しき苦痛の中にありて喜ばん 是は我聖者の言に悖りしことなればなり二 我何の氣力ありてか尚俟ん 我の終いかなれば我なほ耐へ忍ばんや 三わが氣力あに石の氣力のごとくならんや 我肉あに銅のごとくならんや 三わが助けわれの中に無にあらずや 救拯我より逐はなされしにあらずや 四憂患にしつむ者はその友これを憐れむべし 然らずば全能者を畏ることを廢ん 五わが兄弟はわが望を充さざること 溪川のごとく 溪川の流のごとくに過ぎる 一六是は氷のために黒くなり 雪その中に藏るれども一七温暖になる時は消ゆき 熱くなるに及てはその處に絶はつ二八隊旅客身をめぐらして去り 空曠處にいたりて亡ぶ一九テマの隊旅客これを望みシバの旅客これを慕ふ二〇彼等これを望みしによりて愧恥を取り 彼處に至りてその面を赧くす二一か汝等も今は虚しき者なり 汝らは怖ろしき事を見れば則ち懼る三 我あに汝等我に予へよと言しこと有んや 汝らの所有物の中より物を取て 我ために饋れと言しこと有んや 三また敵人の

手より我を救ひ出せと言しことあらんや 虐ぐる者の手より我を贖へと言しことあらんや 我を教へよ 然らば我黙せん 請ふ私の過てる所を 知せよ 正しき言は如何に力あるものぞ 然ながら 汝らの規諫る所は何の規諫とならんや 汝らは言を規正んと想ふや 望の絶たる者の語る所は風のときなり 汝らは孤子のために 籤を擧ぎ 汝らの友をも 商貨にするならん 汝今ねがはくは我に向へ 我は汝らの面の前に 偽はらず 九請ふ再びせよ 不義あらしむる勿れ 請ふ再びせよ 此事において 我正義し 我舌に不義あらんや 我口惡き物を 辨へざらんや

第七章 一人の世にあるは 戦鬪にあるがごとくならずや 又其日は 傭人の日のごとくなるにあらずや 奴僕を 暮を翼がふが如く 傭人のその價を望むがごとく 我は 苦しき月を得させられ 憂はしき夜をあたらる 我臥ば 乃はち言ふ 何時夜あけて 我おきいでんかと 曙まで 頻に 輾轉ふ わが肉は 蟲と土塊とを衣服となし 我皮は 愈てまた 腐る わが日は 機の梭よりも 迅速なり 我望む所なくし之を送る 想ひ見よ わが生命が 氣息なる而已 我目は 再び 福祉を見ること 有し 我を見し者の 眼かさねて 我を見ざらん 汝目を 我にむくるも 我は 已に在ざるべし 九雲の消て 逝がごとく 陰府に 下れる者は 重ねて 上りきたらじ 彼は 再び その家に 歸らず 彼の 郷里も 最早かれを 認めじ 然ば 我は わが口を 禁めず 我心の 痛によりて 語ひわが 神魂の 苦しきによりて 歎かん 我あに 海ならんや 鰐ならんや 汝なにとて 我を守らせ

おきたまふぞ 三 わが 牀われを 慰め わが 寢床わが 愁を 解んと 思ひを する時に 四 汝夢をもて 我を 驚かし 異象をもて 我を 懼れしめたまふ 五 是をもて 我心は 氣息の 閉んことを 願ひ 我この 骨よりも 死を 冀がふ 六 われ 生命を 厭ふ 我は 永く 生るを ことを 願はず 我を 捨おきたまへ 我日は 氣のごときなり 七 人を 如何なる者として 汝これを 大にし之を 心に 留ハ 朝ごとに 之を 看そ ならば 時わかず之を 試みたまふや 九 何時まで 汝われに 目を 離さず 我が 津を 咽む間も 我を 捨おきたまはざるや 二 人を 鑿みたまふ者よ 我罪を 犯したりとて 汝に 何を か 爲ん 何ぞ 我を 汝の 的となして 我に この 身を 厭はしめたまふや 二 汝なんぞ 我の 愆を 赦さず 我罪を 除きたまはざるや 我いま 土の中に 睡らん 汝 我を 尋ねたまふとも 我は 在ざるべし

第八章 時に シュヒヒルダデ 答へて 曰く 二 何時まで 汝かかる事を 言や 何時まで 汝の 口の 言語を 大風のごとくにするや 三 神あに 審判を 曲たまはんや 全能者あに 公義を 曲たまはんや 四 汝の子等 かれに 罪を 獲たるに や之を その 愆の 手に 付したまへり 五 汝もし 神に 求め 全能者に 祈り 六 清く かつ 正しうして あらば 必ず 今 汝を 顧み 汝の 義き 家を 築えしめたまはん 七 然らば 汝の 始は 微小あるとも 汝の 終は 甚だ 大ならん 八 請ふ 汝過にし 代の人に 問へ 彼らの 父祖の 尋究めしところの 事を 學べ 九 我らは 昨日より 有し のみにて 何を も 知らず 我らが 世にある日は 影のごとし 一〇 彼等なんちを 教へ 汝を 諭し 言を その 心より 出さざらんや 一章

もて手を潔むるとも三 汝われを汚はしき穴の中に陥いたまはん而して我衣も我を厭ふにいたらん三神は我のごとく人にあらざれば我かれに答ふべからず 我ら二箇して共に裁判に臨むべからず三 又我らの間には我ら二箇の上に手を置べき仲保あらず四 願くは彼その杖を我より取はなしその震怒をもて我を懼れしめたまはざれ五 然らば我言語て彼を畏れざらん 其は我みづから斯る者と思はざればなり

第一〇章 一 わが心生命を厭ふ 然ば我わが憂愁を包まず言あらはしわが魂神の苦きによりて語はんニわれ神に申さん 我を罪ありしとしたまふ勿れ 何故に我とあらそふかを我に示したまへ 三 なんぢ虐遇を爲し 汝の手の作を打棄て 惡き者の謀計を照すことを善としたまふや 四 汝は肉眼を有たまふや 汝の觀たまふ所は人の觀るがごとくなるや 五 なんぢの日は人間の日のごとく 汝の年は人の日のごとくなるや 六 何とて汝わが愆を尋ねわが罪をしらべたまふや 七 されども汝はすでに我の罪なきを知らまふ 又汝の手より救ひいだし得る者なし 八 汝の手われをいと なみ我をことごとく作れり 然るに汝今われを滅ぼしたまふなり 九 請ふ記念たまへ 汝は土塊をもてすてるがごとくに我を作りたまへり 然るに復われを塵に歸さんとしたまふや 一〇 汝は我を乳のごとく斟ぎ牛酪のごとくに凝しめたまひしに非ずや 一 汝は皮と肉とを我に着せ骨と筋とをもて我を編み 二 生命と恩恵とをわれに授け我を着顧てわが魂神を守りたまへり 三 然

はあれど汝これらの事を御心に藏しおきたまへり 我この事汝の心にあるを知る 四 我もし罪を犯さば汝われをみとめてわが罪を赦したまはじ 五 我もし行状あしからは禍あらん 假令われ義かるとも我頭を擧じ 其は我は衷に羞耻充ち眼にわが患難を見ればなり 一六 もし頭を擧げば獅子のごとくに汝われを追打ち 我身の上に復なんぢの奇しき能力をあらはしたまはん 一七 汝はしばしば證する者を入かへて我を攻め 我にむかひて汝の震怒を増し 新手に新手を加へて我を攻めたまふ 一八 何とて汝われを胎より出したまひしや 然らずば我は息絶え目に見らるること 無く 一九 曾て有ざりし如くならん 即ち我は胎より墓に持ゆかれん 二〇 わが日は幾時も无きに非ずや 願くは彼姑らく息て我を離れ我をして少しく安んぜしめんことを 二 我が往て復返ることなきその先に斯あらしめよ 我は暗き地 死の蔭の地に往ん 三 この地は暗くして晦冥に等しく 死の蔭にして區分なし 彼處にては光明も黑暗のごとし

第一一章 一 是においてナアマ人ゾパル答へて言けるは 二 言語多からば豈答へざるを得んや 口おほき人あに義とせられんや 三 汝も空しき言あに人をして口を閉しめんや 汝嘲らば人んちをして羞しめざらんや 四 汝は言ふ 我教は正し 我は汝の目の前に潔しと 願くは神言を出し 汝にむかひて口を開き 六 智慧の秘密をなんぢに示してその知識の相倍するを願したまはんことを 汝しれ神はなんぢの罪よりも輕くなんぢを處置したまふ

なり七なんぢ神の深事を窮むるを得んや全能者を全く窮むることを得んや八その高きことは天のごとし汝なにを罵し得んや其深きことは陰府のごとし汝なにを知えんや九その量は地よりも長く海よりも潤し〇彼もし行めぐりて人を執へて召集めたまふ時は誰か能くこれを阻まんや二彼は偽る人を善く知りたまふ又惡事は顧みること無して見知たまふなり三虚しき人は悟性なしその生るるよりして野驢馬の駒のごとし四汝もし彼にむかひて汝の心を定め汝の手を舒べ四手に罪のあらんには之を遠く去れ惡をなんぢの幕屋に留むる勿れ五然すれば汝面を擧て玷なかるべく堅く立て懼る事なかるべし六すなはち汝憂愁を忘れん汝のこれを憶ゆることは流れ去し水のごとくならん七なんぢの生存らぶる日は眞晝よりも輝かんだとくら假令暗き事あるとも是は平坦のごとくならん八なんぢは望あるに因て安んじ汝の周圍を見めぐりて安然に寐るにいたらん九なんぢは何にも懼れさせらるること無して懼やまん必ず衆多の者なんぢを悦ばせんと務むべし〇然と惡き者は目矇み迷遁處を失なはん其望は氣の斷ると等しかるべし

第二章 ヨブこたへて言ふ二なんぢら而巳まことに人なり智慧は汝らと共に死ん三我もなんぢらと同じく心あり我はなんぢらの下に立す誰か汝らの言し如き事を知ざらんや四我は神に頼はりて聽るる者なるに今その友に嘲けらるる者となれり嗚呼正しくかつ完たき人あざけらるる五安逸なる者は思ふ輕侮は

不幸なる者に附そひ足のよろめく者を俟と六掠奪ふ者の天幕は繁榮え神を怒らせ自己の手に神を携ふる者は安泰なり七今請ふ獸に問へ然ば汝に教へん天空の鳥に問へ然ばなんぢに語らん八地に言へ然ばなんぢに教へん海の魚もまた汝に述べし九誰かこの一切の者に依てエホバの手のこれを作りしなるを知らざらんや〇一切の生物の生氣および一切の人の靈魂ともに彼の手の中にあり一耳は説話を辨へざらんやその状あたかも口の食物を味ふがごとし二老たる者の中には智慧あり壽長者の中には穎悟あり三智慧と權能は神に在り智謀と穎悟も彼に屬す四視よ彼觀せば再び建ること能はず彼人を閉こむれば開き出すことを得ず五視よ彼水を止むれば則ち涸れ水を出せば則ち地を滅ぼす六權能と穎悟は彼に在り惑はさるる者も惑はす者も共に彼に屬す七彼は議士を裸體にして虜へゆき審判人をして愚なる者とならしめ八王等の權威を解て反て之が腰に繩をかけ九祭司等を裸體にして虜へゆき權力ある者を滅ぼし〇言爽なる者の言語を取除き老たる者の了知を奪ひ二侯伯たる者等に恥辱を蒙らせ強き者の帶を解き三暗中より隠れたる事等を顯し死の蔭を光明に出し四國々を大にしまた之を滅ぼし國々を廣くしまた之を舊に歸し五四地の民の長たる者等の了知を奪ひこれを路なき荒野に吟行はしむ五彼らは光明なき暗にたどる彼また彼らを酔る人のごとくによろめかしむ

第三章 視よわが目これを盡く觀わが耳これを聞て通達れり

二 汝らが知るところは我もこれを知る 我は汝らに劣らず三 然りと雖ども我は全能者に物言ん我は神と論ぜんことをぞむ四 汝らは只謊言を造り設くる者 汝らは皆無用の醫師なり五 願くは汝ら全く黙せよ然するは汝らの智慧なるべし六 請ふわが論する所を聴き我が唇にて辨争ふ所を善く聴け七 神のために汝ら惡き事を言や又かれのために虚偽を述るや八 汝ら神の爲に偏るやまたかれのために争はんとするや九 神もし汝らを鑒察たまはば豈善らんや汝等人を欺むくごとくに彼を欺むき得んや一〇 汝等もし密に私しするあらば彼かならず汝らを買ん一 一の威光なんぢらを懼れしめざらんや 彼を懼るる畏懼なんぢらに臨まざらんや二 なんぢらの諭言は灰に譬ふべしなんぢらの城は土の城となる三 黙して我にかかはらざれ 我言語んとす 何事にもあれ我に來らば來れ四 我なんぞ我肉をわが齒の間に置きわが生命をわが手に置かんや五 彼われを殺すとも我は彼に依頼まん 唯われは吾道を彼の前に明かにせんとす六 彼また終に我救拯とならん 邪曲なる者は彼の前にいたること能はざればなり七 なんぢら聽よ 我言を聴け 我が述る所をなんぢらの耳に入しめよ八 視よ 我すでに吾事を言立べたり 必ず義しとせられんと自ら知る九 誰か能われと辨論ふ者あらん 若あらば我は口を緘て死ん 〇 惟われに二の事を爲たまはざれば我なんぢの面をさけて隠れじ三 なんぢの手を我より離したまへ 汝の威嚴をもて我を懼れしめたまはざれ四 而して汝われを召たま

へ我こたへん 又われにも言はしめて汝われに答へたまへ三 我の愆われの罪いくばくなるや 我の背反と罪とを我に知しめたまへ四 何とて御顔を隠し我をもて汝の敵となしたまふや五 なんぢは吹廻さるる木の葉を威し干あがりたる初殻を追たまふや六 汝は我につきて苦き事等を書しるし 我をして我が幼稚時の罪を身に負しめ七 わが足を足械にはめ 我すべての道を伺ひ 我足の周圍に限界をつけたまふ八 我は腐れたる者のごとくに朽ゆき 蠹に食るる衣服に等し

第四章 婦の産む人はその日少なくて艱難多し二 その來ること花のごとくにして散り 其馳ること影のごとくにして止まらず三 なんぢ是のごとき者に汝の目を啓きたまふや 汝われを汝の前にひきて審判したまふや四 誰か清き物を汚れたる物の中より出し得る者あらん 一人も無し五 その日既に定まりその月の數なんぢに由り 汝これが區域を立て越ざらしめたまふなれば六 是に目を離して安息を得させ之をして傭人のその日を樂しむがごとくならしめたまへ七 それ木には望あり 假令砍るとも復芽を出してその枝絶ず八 たとひ其根地の中に老い 幹土に枯るとも九 水の潤露にあへば即ち芽をふき枝を出して若樹に異ならず 〇 然ど人は死れば消つす 人氣絶なば安に在んや二 水は海に竭き河は涸てかわく三 是のごとく人も寢臥てまた興ず 天の盡るまで自覺ず 睡眠を醒さざるなり四 願はくは汝われを陰府に藏し 汝の震怒の息むまで我を掩ひ 我ために期を定め而して

我を念ひたまへ一四人もし死ばまた生んや我はわが征戦の諸日の間望みをりて我が變更の來るを待ん五なんぢ我を呼たまはん而して我こたへん汝かならず汝の手の作を顧みたまはん六今なんぢは我に步履を數へたまふ我罪を汝うかがひたまはざらんや一七わが愆は凡て囊の中に封じてあり汝わが罪を縫こめたまふ一八それ山も倒れて終に崩れ巖石も移りてその處を離る一九水は石を鑿ち浪は地の塵を押し流す汝は人の望を斷たまふ二〇なんぢは彼を永く攻なやまして去ゆかしめ彼の面容の變らせて逐やりたまふ二一その子尊貴なるも彼は之を知ず卑賤なるもまた之を曉らざるなり二三只己みづからその肉に痛苦を覺え己みづからその心に哀く而已

第一章一テマン人エリバ答へて曰くニ智者あに虚しき知識をもて答へんや豈東風をその腹に充さんや三あに裨なき談益なき詞をもて辨論はんや四まことに汝は神を畏る事を棄てその前に禱することを止む五なんぢの罪なんぢの口を教ふ汝はみづから擇びて狡猾人の舌を用ふ六なんぢの口みづから汝の罪を定む我には非ず汝の唇なんぢの惡きを證す七汝あに最初に世に生れたる人ならんや八山よりも前に出來しならんや九神の御謀議を聞しならんや智慧を獨にて藏めをらんや九なんぢが知る所は我らも知ざらんや汝が曉るところは我らの心にも在ざらんや一〇我らの中には白髪の人および老たる人ありて汝の父よりも年高し一二神の慰藉および夫の柔かき言詞を汝小しとす

るや二なんぢ何ぞかく心狂ふや何ぞかく目をしばたたくや三なんぢ是のごとく神に對ひて氣をいらだて斯る言詞をなんぢの口よりいだすは如何ぞや四人は如何なる者ぞ如何してか潔からん婦の産し者は如何なる者ぞ如何してか義からん五それ神はその聖者にすら信を置たまはず諸の天もその目の前には潔からざるなり六況んや罪を取ること水を飲がごとくする憎むべき穢れたる人をや七我なんぢに語る所あらん聽よ我見たる所を述ん一八是すなはち智者等が父祖より受て隱すところ無く傳へ來し者なり一九彼らに而已この地は授けられて外國人は彼等の中に往來せしこと無りき二〇惡き人はその生る日の間つねに悶へ苦しむ強暴人の年は數へて定めおかる二一その耳には常に懼怖しき音きこえ平安の時に滅ぼす者これに臨む二二彼は幽暗を出得るとは信ぜず目ざされて劔に付さる二三彼食物は何處にありやと言つて尋ねありき黑暗日の備へられて己の側にあるを知る二四患難と苦痛とはかれを懼れしめ戰鬪の準備をなせる王のごとくして彼に打勝ん三五彼は手を伸て神に敵し傲りて全能者に悖り二六頸を強くし厚き楯の面を向て之に馳かかり二七面に肉を滿せ腰に脂を凝し二八荒されたる邑々に住居を設けて人の住べからざる家石堆となるべき所に居る二九是故に彼は富すその貨物は永く保たすその所有物は地に蔓延す三〇また自己は黑暗を出づるに至らず火燄その枝葉を枯さん而してその身は神の口の氣吹によりて亡ゆかん三一彼は虚妄を恃み

て自ら欺くべからず 其報は虚妄なるべければなり 彼の日の
 来らざる先に其事成べし 彼の枝は緑ならじ 葡萄の樹
 のその熟せざる果を振落すがごとく 橄欖の樹のその花を落す
 がごとくなるべし 邪曲なる者の宗族は零落れ 賄賂の家は火
 に焚ん 彼等は惡念を孕み 虚妄を生み 其の胎にて詭計を
 調ふ

第一章 ヨブ答へて曰く 斯る事は我おほく聞り 汝らのみ
 な人を慰めんとして却つて人を煩はす者なり 虚しき言語あに
 終極あらんや 汝なりにに勵されて 應答をなすや 我もまた汝ら
 の如くに言ことを得 もし汝らの身わが身と處を換なば 我は
 言語を練て 汝らを攻め 汝らにむかひて首を搯ことを得 又
 口をもて 汝らを強くし 唇の慰藉をもて 汝らの憂愁を解ことを
 得るなり 六たとひ 我言を出すと 我憂愁は解ず 黙するとも
 何ぞ 我身の安くなること 有んや 彼いま已に 我を疲らしむ 汝
 わが宗族をことごとく 荒せり 八なんぢ 我をして 駈らしめたり 是
 われに向ひて 見證をなすなり 又わが瘦おとろへたる 状貌わが
 面の前に 現はれ 立て 我を攻む 九かれ 怒て われを 撕裂き かつ 窘し
 め 我にむかひて 齒を 嚙鳴し 我敵となり 目を 鋭して 我を 看る 一〇
 彼ら 我にむかひて 口を 張り 我を 賤しめて わが 頬を 打ち 相集ま
 りて 我を 攻む 二 神われを 邪曲なる 者に 交し 惡き 者の 手に 擲ち
 たまへり 三 我は 安穩なる 身なり しに 彼れ いたく 我を 打惱まし 頸
 を 執へて 我を つちくだき 遂に 我を立て 鵠となしたまひ 三 その

射手われを 遠り 圍めり やがて 情もなく 我腰を 射透し わが 膽を
 地に 流れ 出したまふ 四 彼は われを 打敗りて 破壊に 破壊を 加
 へ 勇士のごとく 我に 奔かかりたまふ 五 われ 麻布を わが 肌 に 縫
 つけ 我角を 塵にて 汚せり 六 我面は 泣て 頼くなり 我目縁には 死
 の 蔭あり 七 然れども 我手には 不義あること 無く わが 祈禱は 清
 し 八 地よ 我血を 掩ふな 我號呼は 休む 處を得ざれ 九 視よ 今
 にも 我證となる 者 天に あり わが 眞實を 表明す 者 高き 處に あり
 一〇 わが 朋友は 我を 嘲けれども 我目は 神に むかひて 涙を 注ぐ 二
 願くは 彼人の ために 神と 論辨し 人の 子の ために これが 朋友
 と 論辨せんことを 三 數年 すぎざらば 我は 還らぬ 旅路に 往べし

第一章 ヨブが 氣息は 已にくさり 我日すてに 盡んとし 墳墓わ
 れを 待つ 二 まことに 嘲弄者等 わが 傍に 在り 我目は 彼らの 辨争
 ふを 常に 見ざるを得ず 三 願くは 質を 賜ふて 汝みづから 我の 保證
 となりたまへ 誰か 他に わが 手をつつ 者あらんや 四 汝彼らの 心
 を 閉て 悟るところ 無らしめたまへり 必す 彼らをして 愈らしめ
 たまはじ 五 朋友を 交付して 掠奪に 遭しむる 者は 其子等の 目潰る
 べし 六 彼われを 世の 民の 笑柄とならしめたまふ 我は 面に 唾せ
 らるべき者となれり 七 かつまた 我目は 憂愁によりて 昏み 肢體は
 凡て 影のごとし 八 義しき 者は 之に 驚き 無辜の 者は 邪曲なる 者を見
 て 憤ほる 九 然ながら 義しき 者は その 道を 堅く 持ち 手の 潔淨き 者
 は ますます 力を 得るなり 一〇 請ふ 汝ら 皆ふ たたひ 來れ 我は 汝ら
 の 中に 一人も 智き 者あるを見ざるなり 一 わが 日は 已に 過ぎわ

が計る所わが心に冀ふ所は已に敗れたりニ彼ら夜を晝に變ふ
 黑暗の前に光明ちかつくニ我もし俟つところ有ば是わが家た
 るべき陰府なるのみ我は黑暗にわが牀を展ぶニ四われ朽腐に向
 ひては汝はわが父なりと言ひ蛆に向ひては汝は我母わが姉妹
 なりと言ふニ然ばわが望はいづくにかある我望は誰かこれを
 見る者あらんニ是は下りて陰府の關に到らん之と齊しく我身
 は塵の中に臥靜まるべし

第一八章一シユヒビルダデこたへて曰くニ汝等いつまで言語
 を獵求むることをするや汝ら先曉るべし然る後われら辨論は
 んニわれら何ぞ獸畜とおもはるべけんや何ぞ汝らの目に汚穢た
 る者と見らるべけんや四なんぢ怒りて身を裂く者よ汝のため
 とて地あに棄られんや磐あに其處より移されんや五惡き者の
 光明は滅され其火の焰は照じ六その天幕の内なる光明は暗くな
 り其が上の燈火は滅さるべし七またその強き步履は狹まり其計
 るところは自分を陥いるハすなはち其足に逐れて網に到りまた
 陷阱の上を歩むに九索はその踵に纏り縋これを執ふニ索かれ
 を執ふるために地に隠しあり縋かれを陥しいるるために路に
 設けありニ怖ろしき事四方において彼を懼れしめ其足にした
 がひて彼をおふニその力は餓象其傍には災禍そなはりニそ
 の膚の肢は蝕壞らる即ち死の初子これが肢を蝕壞るなりニ四や
 がて彼はその恃める天幕より曳離されて懼怖の王の許に驅やら
 れんニ五彼に屬せざる者かれの天幕に住み硫磺かれの家の上に

降んニ六下にてはその根枯れ上にてはその枝砍る七彼の跡は地
 に絶え彼の名は街衢に傳はらじ八彼は光明の中より黑暗中に逐
 やられ世の中より驅出されん九彼はその民の中に子も無く孫
 も有じまた彼の住所には一人も遺る者なからんニ〇之が日を見
 るにおいて後に來る者は駭ろき先に出し者は怖おそれんニか
 ならず惡き人の住所は是のごとく神を知ざる者の所は是のご
 とくなるべし

第一九章一ヨブこたへて曰くニ汝ら我心をなやまし言語をも
 て我を打くだくこと何時までぞやニなんぢら已に十次も我を辱
 しめ我を惡く待ひてなほ愧るところ無し四假令われ眞に過ちた
 らんもその過は我の身に止れり五なんぢら眞に我に向ひて誇り
 我身に羞べき行爲ありと證するならば六神われを虐げその網羅
 をもて我を包みたまへりと知るべし七我虐げらるると叫べども
 答なく呼はり求むれども審理なし八彼わが路の周圍に垣を結め
 ぐらして逾る能はざらしめ我が行く途に黑暗を蒙むらしめ九わ
 が光榮を褫ぎ我冠冕を首より奪ひニ四方より我を毀ちて失し
 め我望を樹のごとくに根より抜きニ我にむかひて震怒を燃し
 我を敵の一人と見たまへりニその重旅ひとしく進み途を高く
 して我に攻寄せわが天幕の周圍に陣を張りニ彼わが兄弟等を
 して遠くわれを離れしめたまへり我を知る人々は全く我に疎
 くなりぬニ四わが親戚は往來を休めわが朋友はわれを忘れニ五
 わが家に寄寓る者およびわが婢等は我を見て外人のごとくす

我かれらの前にては異國人のごとし一六 われわが僕を喚どもこ
 たへず我口をもて彼に請はざるを得ざるなり一七 わが氣息はわ
 が妻に厭はれわが臭氣はわが同胎の子等に嫌はる一八 童子等さ
 へも我を侮どり我起あがれば即ち我を嘲ける一九 わが親しき友
 われを惡みわが愛したる人々ひるがへりてわが敵となれり二〇
 わが骨はわが皮と肉とに貼り我は僅に齒の皮を全うして逃れ
 ののみ二一 わが友よ汝等われを恤れめ我を恤れめ神の手われを
 撃り二三 汝らなにとて神のごとくして我を攻めわが肉に壓こと
 なきや二三 望むらくは我言の書留られんことを望むらくは我
 言書に記されんことを四 望むらくは鐵の筆と鉛とをもて之を
 永く磐石に鑄つけおかんことを五 われ知る我を贖ふ者は活
 後の日に彼かならず地の上に立ん六 わがこの皮この身の朽は
 てん後われ肉を離れて神を見ん七 我みづから彼を見たてまつ
 らん我目かれを見んに識らぬ者のごとくならじ我が心これを
 望みて焦る八 なんぢら若われら如何に彼を攻んかと言ひまた
 事の根われに在りと言は九 劍を懼れよ忿怒は劍の罰をきたら
 す斯なんぢら遂に審判のあるを知ん

第二〇章一 ナアマ人ゾバルこたへて曰く二 これに因てわれ答を
 なすの思念を起し心しきりに之がために急る三 我を辱しむる
 警語を我聞ざるを得ず然しながらわが了の性われをして答
 ぶることを得せしむ四 なんぢ知すや古昔より地に人の置れしよ
 り以來五 惡き人の勝誇は暫時にして邪曲なる者の歡樂は時の間

のみ六 その高天に達しその首雲に及ぶとも七 終には己の糞の
 ごとくに永く亡絶べし彼を見識る者は言ん彼は何處にありや
 と八 彼は夢の如く過ぎりて復見るべからず夜の幻のごとく追は
 らはれん九 彼を見たる目かさねてかれを見ることあらず彼の住
 たる處も再びかれを見ること無らん一〇 その子等は貧しき者に
 實待を求めん彼もまたその取し貨財を手づから償さん一その
 骨に少壯氣勢充り然れどもその氣勢もまた塵の中に彼ととな
 じく臥ん二 かれ惡を口に甘しとして舌の底に藏め三 愛みて捨
 ず之を口の中に含みをる四 然どその食物腸の中にて變り腹
 の内にて蠅の毒とならん五 かれ貨財を呑たれども復之を吐い
 ださん神これを彼の腹より推いだしたまふべし六 かれは蠅の
 毒を吸ひ 虺の舌に殺されん七 かれは蜂蜜と牛酪の湧て流る
 る河川を視ざらん八 その勞苦て獲たる物は之を償して自ら食
 はず又それを求めたる所有よりは快樂を得じ九 是は彼貧しき
 者を虐遇げて之を棄たればなり假令家を奪ひとるとも之を改
 め作ることを得ざらん一〇 かれはその腹に飽ことを知ざるが故
 に自己の深く喜ぶ物をも保つこと能はじ二三 かれが遺して食は
 ざる物とては一も無し是によりてその福祉は永く保たじ二三
 の繁榮の眞盛において彼は艱難に迫られ乏しき者すべて手を
 これが上に置ん三 かれ腹を充さんとすれば神烈しき震怒をそ
 の上に下しその食する時にこれをその上に降したまふ二四 かれ
 鐵の器を避れば銅の弓これを射透す三五 是に於て之をその身よ

り拔ば閃く鏃その膽より出きたりて畏懼これに臨む二六 各種の
 黑暗これが寶物ををほろぼすために蓄へらる 又人の吹おこせ
 しに非る火かれを焚きその天幕に遺りてをる者をも焚ん二七 天か
 れの罪を顯はし地興りて彼を攻ん二八 その家の儲蓄は亡て神の
 震怒の日に流れ去ん二九 是すなはち惡き人が神より受る分神の
 これに定めたまへる數なり

第二章 ヨブこたへて曰く二 請ふ汝等わが言を謹んで聽ぎ之
 をもて汝らの慰藉に代よ三 先われに容して言しめよ 我が言る後
 なんぢ嘲るも可し四 わが怨言は世の人の上につきて起れる者な
 らんや 我なんぞ氣をいらだつ可らざらんや五 なんぢら我を見て
 驚き手を口にあてよ六 われ思ひまはせば畏しくなりて身體しき
 りに戰慄く七 惡き人何とて生ながらへ老かつ勢力強くなるや八
 その子等はその周圍にありてその前に堅く立ちその子孫もそ
 の目の前に堅く立べし九 またその家は平安にして畏懼なく神の
 杖その上に臨まじ一〇 その牝牛は種を與へて過らずその牝牛は
 子を産てそこなふ事なし二 彼等はその少き者等を外に出すこ
 と群のごとしその子等は舞をどる三 彼等は鼓と琴とをもて歌
 ひ笛の音に由て樂み三 その日を幸福に暮しまばたくまに陰府
 にくだる 四 然はあれども彼等は神に言らく我らを離れ賜へ我
 らは汝の道をしることを好まず五 全能者は何者なれば我らこ
 れに事ふべき 我儕これに祈るとも何の益を得んやと六 視よ彼
 らの福祿は彼らの力に由にあらざるなり 惡人の希圖は我の與

する所にあらず一七 惡人のその燈火を滅る事幾度ありしかそ
 の滅亡のこれに臨む事神の怒りて之に艱苦を蒙らせたまふ事
 幾度有しか一八 かれら風の前の藁の如く暴風に吹さらるる 刳
 の如くなること幾度有しか一九 神かれの愆を積たくはへてその
 子孫に報いたまふか之を彼自己の身に報い知しむるに如す二〇
 かれをして自らその滅亡を目に視させかつ全能者の震怒を飲
 しめよ二一 その月の數すでに盡るに於ては何ぞその後の家に關
 する所あらん二二 神は天にある者等をさへ審判たまふなれば誰
 が能これに知識を教へんや二三 或人は繁榮を極め全く平穩にか
 つ安康にして死に二四 その器に乳充ちその骨の髓は潤ほへり二五
 また或人は心を苦しめて死し終に福祉をあぢはふる事なし二六
 是等は俱に齊しく塵に臥して蛆におほはる二七 我まことに汝ら
 の思念を知り 汝らが我を攻撃んとするの計略を知る二八 なんぢ
 らは言ふ王侯の家は何に在る 惡人の住所は何にあると二九 汝ら
 は路往く人々に詢ざりしや 彼等の證據を曉らざるや三〇 すなは
 ち滅亡の日に惡人遣され烈しき怒の日に惡人たづさへ出さる三
 一 誰か能かれに打向ひて彼の行爲を指示さんや 誰か能彼の爲た
 る所を彼に報ゆることを爲せん三二 彼は昇れて墓に到り塚の上に
 て守護ることを爲す三三 谷の土塊も彼には快し一切の人その後
 に従ふ 其前に行る者も數へがたし三四 既に是の如くなるに汝等
 なんぞ徒に我を慰さめんとするや 汝らの答ふる所はただ虚偽
 のみ

第二章一是においてテマン人エリパズこたへて曰く二人神を益する事をえんや智人も唯みづから益する而已なるぞかし三なんぢ義かるとも全能者に何の歡喜かあらんなんぢ行爲を全たふするとも彼に何の利益かあらん四彼汝の畏懼の故によりて汝を責め汝を鞫きたまはんや五なんぢの惡大なるにあらざる汝の罪はきはまり無し六即ち汝は故なくその兄弟の物を抑へて質となし裸なる者の衣服を剥て取り七渴者に水を與へて飲しめず饑る者に食物を施こさず八力ある者土地を得貴き者その中に住む九なんぢは寡婦に手を空しうして去しむ孤子の腕は折る一〇是をもて網羅なんぢを環り畏懼にはかに汝を擾す

二なんぢ黑暗を見ずや洪水のなんぢを覆ふを見ずや三神は天の高に在すならずや星辰の巔あ如何に高きぞや三是によりて汝は言ふ神なにをかししめさん豈よく黒雲の中より審判するを得たまはんや四濃雲かれを蔽へば彼は見たまふ所なし唯天の蒼穹を歩みたまふ五なんぢ古昔の世の道を行なはんとするや是あしき人の踐たりし者ならずや六彼等は時いまだ至らざるに打絶れその根基は大水に押流されたり七彼ら神に言けらく我儕を離れたまへ全能者われらのために何を爲すことを得んと二ハしかるに彼は却つて佳物を彼らの家に盈したまへり但し惡人の計畫は我に與する所にあらず九義しき者は之を見て喜び無辜者は彼らを笑ふ一〇曰く我らの仇は誠に滅ぼされ其盈餘れる物は火にて焚つくさる二請ふ汝神と和らぎて平安を

得よ然らば福祿なんぢに來らん三請ふかれの口より教誨を受けその言語をなんぢの心に藏めよ三なんぢもちし全能者に歸入り且なんぢの家より惡を除き去は汝の身再び興されん四なんぢの寶を土の上に置きオフルの黄金を谿河の石の中に置け五然れば全能者なんぢの寶となり汝のために白銀となりたまふべし六而してなんぢは又全能者を喜び且神にむかひて面をあげん七もなんぢ彼に祈らば彼なんぢに聽たまはん而して汝その誓願をつくのひ果さん八なんぢ事を爲んと定めなばその事なんぢに成ん汝の道には光照ん九其卑く降る時は汝いふ昇る哉と彼は謙遜者を拯ひたまふべし一〇かれは罪なきに非ざる者をも拯ひたまはん汝の手の潔淨によりて斯る者も拯はるべし

第三章一ヨブこたへて曰く二我は今日にても尚つぶやきて服せずわが禍災はわが嘆息よりも重し三ねがはくは神をたづねて何處にか遇まつるを知り其御座に參いたらんことを四我この愁訴をその御前に陳べ口を極めて辨論はん五我その我に答へたまふ言を知りまた其われに言たまふ所を了らん六かれ大なる能をもて我と争ひたまはんや然らじ反つて我を着きたまふべし七彼處にては正義人かれと辨争ふことを得斯せば我を鞫く者の手を永く免かるべしハしかるに我東に往くも彼いませず西に往くも亦見たてまつらず九北に工作きたまへども遇まつらず南に隠れ居たまへば望むべからず一〇わが平生の道は彼知たまふ彼われを試みたまはば我は金のごとくして出きたらん一わ

が足は彼の步履に堅く隨がへり我はかれの道を守りて離れざりき二我はかれの唇の命令に違はず我が法よりも彼の口の言語を重せり三かれは一に屈る者にまします誰か能かれをして意を變しめん彼はその心に慾する所をかならず爲たまふ二四然ば我に向ひて定めし事を必らず成就たまはん是のとき事を多く彼は爲たまふなり五是故に我かれの前に慄ふ我考ふれば彼を懼る二六神わが心を弱くならしめ全能者われをして懼れしめたまふ二七かく我は暗の來らぬ先わが面を黑暗の覆ふ前に打絶れざりき

第二章一なゆゑに全能者時期を定めおきたまはざるや何故に彼を知る者その日を見ざるや二人ありて地界を侵し群畜を奪ひて牧ひ三孤子の驢馬を驅去り寡婦の牛を取て質となし四貧しき者を路より推退け世の受難者をして盡く身を匿さしむ五視よ彼らは荒野にをる野驢馬のごとく出て業を爲て食を求め野原よりその子等のために食物を得六圍にて惡き者の麥を刈りまたその葡萄酒の遺餘を摘む七かれらは衣服なく裸にして夜を明し覆ふて寒氣を禦ぐべき物なし八山の暴風に濡れ庇はるるところ無して岩を抱く九孤子を母の懷より奪ふ者あり貧しき者の身につける物を取て質となす者あり一〇貧き者衣服なく裸にて歩き饑つつ麥束を擔ふ一人の垣の内にて油を搾めまた渴きつ酒醪を踐む二邑の中より人々の呻吟たちのぼり傷けられたる者の叫喚おこる然れども神はその怪事を省みたまはず三また

光明に背く者あり光の道を知ず光の路に止らず四人を殺す者味爽に興いで受難者や貧しき者を殺し夜は盜賊のごとくす五姦淫する者は我を見る目はなからんと言てその目に昏暮をつかがひ待ち而してその面に覆ふ物を當つ六また夜分家を通つ者あり彼等は晝は閉こもり居て光明を知らず七彼らには晨は死の蔭のごとし是死の蔭の怖ろしきを知らばなり八彼は水の面に疾ながるる物の如しその産業は世の中に詭はるその身重ねて葡萄園の路に向はず九亢旱および炎熱は雪水を直に乾涸す陰府が罪を犯せし者におけるも亦かくのごとし一〇これを宿せし腹これを忘れ蛆これを好みて食ふ彼は最早世におほえらること無くその惡は樹を折るが如くに折る二是すなはち孕まらず産ざりし婦人をなやまし寡婦を憐れまざる者なり三神はその權能をもて強き人々を保存へさせたまふ彼らは生命あらじと思ふ時にも復興る三神かれらに安泰を賜へば彼らは安らかなり而してその目をもて彼らの道を見そなはしたまふ四かれらは旺盛になり暫時が間に無なり卑くなりて一切の人のごとくに没し麥の穂のごとくに斷る五すでに是のごとくなれば誰か我の謬まれるを示してわが言語を空しくすることを得ん

第二章一時にシユヒ人ビルダテこたへて曰く二神は大權を握りたまふ者畏るべき者にましまし高き處に平和を施したまふ三その軍旅數ふることを得んや其光明なる物をか照さざらん四然ば誰か神の前に正義かるべき婦人の産し者いかでか清かるべ

き五 視よ月も輝かず 星も其目には清明ならず六 いはんや蛆のごとき人盡のごとき人の子をや

第二章 ヨブこたへて曰くニなんぢ能力なき者を如何に助けしや 氣力なきものを如何に救ひしや 三 智慧なき者を如何に誨へしや 穎悟の道を如何に多く示ししや 四 なんぢ誰にむかひて言語を出ししや なんぢより出しは誰が靈なるや 五 陰靈水またその中に居る者の下に慄ぶ六 かれの御前には陰府も顯露なり 滅亡の坑も蔽ひ匿す所なし七 彼は北の天を虚空に張り 地を物なき所に懸けたまふ八 水を濃雲の中に包みたまふてその下の雲裂せず九 御寶座の面を隠して雲をその上に展べ一〇 水の面に界を設けて光と暗とに限を立たたまふニ かれ叱咤たまへば天の柱震ひかつ怖るニその權能をもて海を静めその智慧をもてラハブを擊碎きニその氣嘘をもて天を輝かせ其手をもて逃る蛇を衝とほしたまふ 四 視よ是等はただその御工作の端なるのみ 我らが聞ところの者は如何にも微細なる耳語ならずや 然とそその權能の雷轟に至りては誰かこれを曉らんや

第二章 ヨブまた語を繼ぎていはくニわれに義しき審判を施したまはざる神わが心魂をなやまし給ふ全能者此神は活くニわが生命なほ全くわれの衷にあり 神の氣息なほわが鼻にあり 四 わが口は惡を言す わが舌は謊言を語らじ 五 我決めて汝等を是とせじ 我に死るまで我が罪なきを言ふことを息じ 六 われ堅くわが正義を持ちて之を棄じ 我は今まで一日も心に責られし事なし七 我に敵する者は惡き者と成り 我を攻る者は義からざる者と成るべし 八 邪曲なる者もし神に絶れその魂神を脱とらるに於ては何の望かあらん九 かれ艱難に罹る時に神その呼號を聽いたたまはんや一〇 かれ全能者を喜こばんや 常に神を顧んや一 一 われ神の御手を汝等に教へん 全能者の道を汝等に隠さじ 二 視よ汝等もみな自らこれを觀たり 然るに何ぞ斯愚蒙をきはむるや一 三 惡き人の神に得る分強暴の人の全能者より受る業は是なり一 四 その子等蕃れば劍に殺さるその子孫は食物に飽す 一五 その遣れる者は疫病に斃れて埋められその妻等は哀哭をなさず 一六 かれ銀を積こと塵のごとく衣服を備ふること土のごとく なるとも一七 その備ふる者は義き人これを着ん またその銀は無辜者これを分ち取ん 一八 その建る家は蟲の巢のごとく また番人の造る茅家のごとし 一九 彼は富る身にて寢臥し 重ねて興ること無し また目を開けば即ちその身きえ亡す 二〇 懼ろしき事大水のごとく 彼に追及き夜の暴風かれを奪ひ去る 二一 東風かれを颺けて去り 彼をその處より吹はらふ 三 神かれを射て恤まず 彼その手より逃れんともがく 三 人かれに對ひて手を鳴し 嘲りわらひてその處をいでゆかしむ

第二章 白銀掘いだす坑あり 煉るところの黄金は出處あり 二 鐵は土より取り 銅は石より鎔して獲るなり 三 人すなはち黑暗を破り 極より極まで尋ね窮めて黑暗および死蔭の石を求む 四 その穴を穿つこと深くして上に住む人と遠く相離れその上を

歩む者まつたく之を覺えず是のごとく身を絶下げ遙に人と隔りて空に懸る地その上は食物を出し其下は火に覆へざるがごとく覆へる六その石の中には碧の玉のある處あり黄金の沙またその内にあり七その逕は鷲鳥もこれを不知鷹の目もこれを看ず八驚き獸も未だこれを踐す猛き獅子も未だこれを通らず九人堅き磐に手を加へまた山を根より倒し一〇岩に河を掘り各種の寶き物を目に見とめ一水路を塞ぎて漏ざらしめ隠れたる寶物を光明に取いだすなり二然ながら智慧は何處よりか覓め得ん明哲の在る所は何處ぞや三人その價を不知ず人のすめる地に獲べからず四淵は言ふ我の内に在らずと海は言ふ我と偕ならずと五精金も之に換るに足す銀も秤りてその價となすを得ず

一六 オフルの金にてもその價を量るべからず 貴き青玉も碧玉もまた然り一七黄金も玻璃もこれに並ぶ能はず 精金の器皿も之に換るに足す一八珊瑚も水晶も論にたらず 智慧を得るは眞珠を得るに勝る一九エテオピアより出る黄玉もこれに並ぶあたはず 純金をもてするともその價を量るべからず二〇然ば智慧は何處より来るや 明哲の在る所は何處ぞや二一是は一切の生物の目に隠れ 天空の鳥にも見えず二三滅亡も死も言ふ我等はその風聲を耳に聞し而已二三神その道を曉り給ふ彼その所を知りたまふ二四そは彼は地の極までも觀そなはし天が下を看きはめたまへばなり二五風にその重量を與へ水を度りてその量を定めたまひし時二六雨のために法を立て 雷霆の光のために途を設けたまひし時

二七 智慧を見て之を顯はし之を立て試みたまへり二八 また人に言たまはく視よ主を畏るるは是智慧なり 惡を離るるは明哲なり 第二九章 ヨブまた語をつぎて曰く二 嗚呼過にし年月のごとくならまほし 神の我を護りたまへる日のごとくならまほし三 かの時には彼の燈火わが首の上に輝やき彼の光明によりて我黑暗を歩めり四 わが壯なりし日のごとくならまほし 彼時には神の恩恵わが幕屋の上にあき五 かの時には全能者なほ我とともに在しわが子女われの周圍にあき六 乳ながれてわが足跡を洗ひ我が傍なる盤油を灌ぎいだせり七 かの時には我いでて邑の門に上りゆきわが座を街衢に設けたり八 少き者は我を見て隠れ老たる者は起あがりて立ち九 牧伯たる者も言談ずしてその口に手を當て一〇 貴き者も聲ををさめてその舌を上顎に貼たりき一一 我事を耳に聞る者は我を幸福なりと呼び 我を目に見たる者はわがために證據をなしぬ一二 是は我助力を求むる貧しき者を拯ひ孤子および助くる人なき者を拯ひたればなり一三 亡びんとせし者われを祝せり 我また寡婦の心をして喜び歌はしめたり一四 われ正義を衣また正義の衣る所となれり 我が公義は袍のごとく冠冕のごとし一五 われは盲目の目となり跛者の足となり一六 貧き者の父となり 知ざる者の訴訟の由を究め一七 惡き者の牙を折りその齒の間より獲物を取いだせり一八 我すなはち言けらく 我はわが巢に死ん 我が日は砂の如く多からん一九 わが根は水の邊に蔓り 露わが枝に終夜おかん二〇 わが榮光はわが身に新なるべく

わが弓はわが手に何時も強からんと二一人々われに聴き黙して
 我が教を俟ち三わが言し後は彼等言を出さず我説ところは
 彼等に甘露のごとく三かれらは我を望み待つこと雨のごとく
 口を開きて仰ぐこと春の雨のごとくなりき二四われ彼等にむか
 ひて笑ふとも彼等は敢て眞實とおもはず我面の光を彼等は除く
 ことをせざりき三五われは彼等のために道を選びその首として
 座を占め軍中の王のごとくして居りまた哀哭者を慰さむる人
 のごとくなりき

第三〇章 然るに今は我よりも年少き者等われを笑ふ彼等の父
 は我が賤しめて群の犬と並べ置くことをもせざりし者なり二ま
 たかれらの手の力もわれに何の用をかなさん彼らは其氣力す
 でに衰へたる者なり三かれらは缺乏と饑とによりて瘦おとるへ
 荒かつ廢れたる暗き野にて乾ける地を咬む四すなはち灌木の中
 にて藜を摘み若の根を食物となす五彼らは人の中より逐いださ
 る盜賊を追ふがごとくに人かれらを追て呼はる六彼等は懼ろし
 き谷に住み土坑および磐穴に居り七灌木の中に嘶なき荆棘の
 下に偃す八彼らは愚蠢なる者の子 卑むべき者の子にして國よ
 り撃いださる九しかるに今は我かれらの歌謡に成り彼らの嘲哂
 となれり一〇かれら我を厭ふて遠く我を離れたわが面に唾す
 ることを辭まず二神わが綱を解て我をなやましたまへば彼等
 もわが前にその韉を縦せり三この輩わが右に起あがりわが足
 を推のけ我にむかひて滅亡の路を築く三彼らは自ら便なき者

なれども尚わが逕を毀ちわが滅亡を促す二四かれらは石垣の大
 なる崩口より入がごとくに進み來り破壊の中にてわが上に乗
 かり五懼ろしき事わが身に臨み風のごとくに我が尊榮を吹
 はらふわが福祿は雲のごとくに消失す六今はわが心われの衷
 に捨て流れ患難の日かたく我を執ふ七夜にいれば我骨刺れて
 身を離るわが身を噬む者つひに休むこと無し八わが疾病の大
 なる能によりてわが衣服は醜き様に變り裏衣の襟の如くに我
 身に固く附く九神われを泥の中に投こみたまひて我は塵灰に
 等しくなれり一〇われ汝にむかひて呼はるに汝答へたまはず我
 立るるに汝只われをながめ居たまふ二なんぢは我にむかひ
 て無情なりたまひ御手の能力をもて我を攻撃たまふ三なんぢ
 我を擧げ風の上に乗て負去しめ大風の音とともに消亡しめた
 まふ三われ知る汝はわれを死に歸らしめ一切の生物の終に集
 る家に歸らしめたまはん四かれは必ず荒塚にむかひて手を舒
 たまふこと有じ假令人滅亡に陥るとも是等の事のために號呼
 ぶことをせん五苦みて日を送る者のために我哭ざりしや貧し
 き者のために我心うれへざりしや二六われ吉事を望みしに凶事
 きたり光明を待しに黑暗きたれり三七わが腸沸かへりて安か
 らず患難の日我に追及ぬ二八われは日の光を蒙らずして哀しみ
 つつ歩き公會の中に立て助を呼もとむ二九われは山犬の兄弟
 となり駝鳥の友となれり三〇わが皮は黒くなりて剥落ちわが骨
 は熱によりて焚け三一わが琴は哀の音となりわが笛は哭の聲と

なれり

第三章一我わが目と約を立たり何ぞ小艾を慕はんや二然せば上より神の降し給ふ分は如何なるべきぞ高處より全能者の與へ給ふ業は如何なるべきぞ三惡き人には滅亡きたらざらんや善らぬ事を爲す者には常ならぬ災禍あらざらんや四彼わが道を見そなはしわが步履をことごとく數へたまはざらんや五我虚誕とつれだちて歩みし事ありやわが足虚偏に奔從がひし事ありや六請ふ公平き權衡をもて我を稱れ然ば神われの正しきを知たまはん七わが步履もし道を離れわが心もしわが目に隨がひて歩みわが手にもし汚のつきてあらば八我が播たるを人食ふも善しわが産物を根より拔るるも善し九われもし婦人のために心まよへる事あるか又は我もしわが隣の門にありて伺ひし事あらば一〇わが妻ほかの人のために臼磨きほかの人々かれの上に寝るも善し二其は是は重き罪にして裁判人に罰せらるべき惡事なればなり三是はすなはち滅亡にまでも燬いたる火にしてわが一切の産をことごとく絶さん三わが僕あるひは婢の我と辯争ひし時に我もし之が權理を輕んぜし事あらば四神の起あがりたまふ時には如何せんや神の臨みたまふ時には何と答へまつらんや五われを胎内に造りし者また彼をも造りたまひしならずやわれらを腹の内に形造りたまひし者は唯一の者ならずや二六我もし貧き者にその願ふところを獲しめず寡婦をしてその目おとろへしめし事あるか二七または我獨みつから食物を啖ひ

て孤子にこれを啖はしめざりしこと有るか二八却つて彼らは我が若き時より我に育てられしこと父におけるが如し我は胎内を出てより以來寡を導びく事をせり二九われ衣服なくして死んとする者あるひは身を覆ふ物なくして居る人を見し時に三〇その腰もし我を祝せずまた彼もしわが羊の毛にて温まらざりし事あるか三一われを助くる者の門にをるを見て我みなしごに向ひて手を上し事あるか三二然ありしならば肩骨よりしてわが肩おち骨とはなれてわが腕折よ三三神より出る災禍は我これを懼るその威光の前には我能力なし三四我もし金をわが望となし精金にむかひて汝わが所頼なりと言しこと有か三五我もしわが富の大なるとわが手に物を多く獲たることを喜ひしことあるか二六われ日の輝くを見または月の輝わたりて歩むを見し時二七心竊にまよひて手を口に接しことあるか二八是もまた裁判人に罪せらるべき惡事なり我もし斯なせし事あらば上なる神に背しなり二九我もし我を惡む者の滅亡るを喜ひ又は其災禍に罹るによりて自ら誇りし事あるか三〇我は之が生命を呪ひ索めて我口に罪を犯さしめし如き事ならず三一わが天幕の人は言はずや彼の肉に飽ざる者いづこにか在んと三二旅人は外に宿らずわが門を我は街衢にむけて啓けり三三我もしアダムのごとくわが罪を蔽ひわが惡事を胸に隠せしことあるか三四すなはち大衆を懼れ宗族の輕蔑に怖ぢて口を閉ぢ門を出ざりしことあるか三五嗚呼われの言ところを聽わくる者あらまほし一我が花押ここに

在り願くは全能者われに答へたまへ。我を訴ふる者みづから訴訟状を書け三六。われ必ず之を肩に負ひ冠冕のごとくこれを首に結はん。我わが步履の數を彼に述ん。君王たる者のごとくして彼に近づかん。三八。わが田圃號呼りて我を攻めその阡陌のごとく泣さけぶあるか。三九。若われ金を出さずしてその産物を食ひまたはその所有主をして生命を失はしめし事あらば。四〇。小麦の代に蒺藜生いで大麥のかはりに雜草おひ出るとも善し。ヨブの詞をはりぬ。

第三章。ヨブみづから見て己の正義とするに因て此三人の者之に答ふる事を止む。時にラムの族。ブジ人。バラケルの子。エリフ。怒を發せり。ヨブ神より己を正しとするに因て彼ヨブにむかひて怒を發せり。またヨブの三人の友答ふるに詞なくして猶ヨブを罪ありとせしによりて彼らにむかひて怒を發せり。四。エリフはヨブに言ふことをひかへて俟をりぬ。是は自己よりも彼等年老たればなり。五。茲にエリフの三人の口に答ふる詞の有ざるを見て怒を發せり。六。ブジ人。バラケルの子。エリフすなはち答へて曰く。我は年少く汝等は年老たり。是をもて我はばかりて我意見をなんぢらに陳ることを敢てせざりき。七。我意へらく日を重ねたる者宜しく言を出すべし。年を積たる者宜しく智慧を教ふべし。八。但し人の衷には靈あり。全能者の氣息人に聰明を與ふ。九。大なる人すべて智慧あるに非ず。老たる者すべて道理に明白なるに非ず。一〇。然ば我言ふ。我に聽け。我もわが意見を陳ん。一。視よ。我は汝

らの言語を俟ち。なんぢらの辯論を聽き。なんぢらが言ふべき言語を尋ね盡すを待り。三。われ細に汝らに聽し。が汝らの中にヨブを駁折る者一人も無く。また彼の言詞に答ふる者も無し。一。おそらくは汝等いはん。我ら智慧を見得たり。彼に勝つ者は唯神のみ人は能はずと。四。彼はその言語を我に向て發さざりき。我はまた汝らの言ふ所をもて彼に答へじ。五。彼らは愕ろきて復答ふる所なく。言語かれらの衷に浮はず。一六。彼等ものいはず。立とどまりて重ねて答へざればとて。我あに俟をるべけんや。一七。我も自らわが分を答へわが意見を吐露さん。一八。われには言滿ちわが衷の心しきりに迫る。一九。わが腹は口を啓かざる酒のごとし。新しき皮囊のごとく。今にも裂んとす。二〇。われ説いたして胸を安んぜんとす。われ口を啓きて答へん。二。かならず我は人に偏らず。人に諂はじ。三。我は諂らふことを知ず。もし諂らばば。我の造化主ただちに我を絶たまふべし。

第三章。然ばヨブよ。請ふ我が言ふ事を聽け。わが一切の言語に耳を傾む。けよ。二。視よ。我口を啓き。舌を口の中に動かす。三。わが言ふ所は正義。心より出づ。わが唇あきらかにその知識を陳ん。四。神の靈われを造り。全能者の氣息われを活しむ。五。汝もし能せば。我に答へよ。わが前に言をいひつらねて立て。六。我も汝とおなじく神の者なり。我もまた土より取てつくられしなり。七。わが威嚴はなんぢを懼れしめず。わが勢はなんぢを壓せず。八。汝わが聽くところに。て言談り。我なんぢの言語の聲を聞けり。云く。九。われは潔淨くして

愆なし我は辜なく悪き事わが身にあらず。○視よ彼われを攻る
 鬻隙を尋ねわれを己の敵と算へ。二わが脚を椶に夾めわが一切
 の擧動に目を着たまふと。三視よ我なんぢに答へんなんぢ此事
 において正義からず。神は人よりも大なる者にいませり。三彼そ
 の凡て行なふところの理由を示したまはずとて汝かれにむかひ
 て辯争そふは何ぞや。四まことに神は一度二度と告示したまふ
 なれど人これを曉らざるなり。五人熟睡する時または床に睡る
 時に夢あるひは夜の間の異象の中に。六かれ人の耳をひらき
 その教ふるところを印して堅うし。七斯して人にその悪き業を
 離れしめ傲慢を人の中より除き。八人の魂靈を護りて墓に至ら
 しめず。人の生命を護りて劍にほろびざらしめたまふ。九人床に
 ありて疼痛に攻られその骨の中に絶ず。戦鬪のあるあり。二○その
 氣食物を厭ひその魂靈うまき物をも嫌ふ。三その肉は瘦おちて
 見えず。その骨は見えざりし者までも顯露になり。四その魂靈は
 墓に近よりその生命は滅ぼす者に近づく。五しかる時にもし彼
 とともに一箇の使者あり。千の中の一箇にして中保となり。正し
 き道を人に示さば。二四神かれを憫れみて言給はん。彼を救ひて墓
 にくだること無らしめよ。我すでに收贖の物を得たりと。三五その
 肉は小兒の肉よりも瑞々しくなり。その若き時の形状に歸らん。二
 六かれ若し神に禱らば神かれを顧りみ。彼をしてその御面を喜こ
 び見ることを得せしめたまはん。神は人の正義に報をなしたま
 ふべし。二七かれ人の前に歌ひて言ふ。我は罪を犯し正しきを枉た

り。然ど報を蒙らず。二八神わが魂靈を贖ひて墓に下らしめず。わが
 生命光明を見ん。二九そも神は是等のもろもろの事をし。ばし
 ば人におこなひ。三〇その魂靈を墓より牽かへし。生命の光明をも
 て彼を照したまふ。三一ヨブよ耳を傾むけて我に聴け。請ふ黙せよ
 我かたらん。三二なんぢもし言ふべきことあらば我にこたへよ。請
 ふ語れ。我なんぢを義とせん。と慾すればなり。三三もし無ば我に聴
 け。請ふ黙せよ。我なんぢに智慧を教へん。

第三四章。エリフまた答へて曰く。二なんぢら智慧ある者よ。我言
 を聴け。知識ある者よ。我に耳を傾むけよ。三口の食物を味はふこと
 く。耳は言詞を辨まふ。四われら自ら是非を究めわれらもろとも
 善惡を明らかにせん。五それヨブは言ふ。我は義し。神われに正しき
 審判を施したまはず。六われは義しかれども。偏る者とせらる。我
 は愆なれども。わが身の矢創愈がたしと。七何人かヨブのごとく
 ならん。彼は罵言を水のごとくに飲み。八悪き事を爲す者等と交は
 り。惡人とともに歩むなり。九すなはち彼いへらく。人は神と親し
 むとも。身に益なしと。一〇然ばなんぢら心ある人々よ。我に聴け。神
 は惡を爲すことを決めて無く。全能者は不義を行ふこと決めて
 無し。二却つて人の所爲をその身に報い。人をしてその行爲にし
 たがひて獲るところあらしめたまふ。三かならず神は惡き事を
 なしたまはず。全能者は審判を枉たたまはざるなり。四たれかこの
 地を彼に委ねし者あらん。誰か全世界を定めし者あらん。五神も
 しその心を己にのみ用ひ。その靈と氣息とを己に收回したまは

ば五もろもろの血肉ごとく亡び人も亦塵にかへるべし一六
 なんぢもし曉ることを得ば請ふ我に聽けわが言詞の聲に耳を側
 だてよ一七公義を惡む者あに世ををさむるを得んやなんぢあに
 至義き者を惡しとすべけんや一八王たる者にむかひて汝は邪曲
 なりと言ひ牧伯たる者にむかひて汝らは惡しといふべけんや一
 九まして君王たる者をも偏視す貧しき者に超て富る者をかへり
 みるごとき事をせざる者にむかひてをや斯爲たまふは彼等み
 な同じくその御手の作るごころなればなり二〇彼らは瞬く時間
 に死に民は夜の間に滅びて消失せ力ある者も人手によらずし
 て除かる二一それ神の目は人の道の上にある神は人の一切の
 步履を見そなはず二三惡を行なふ者の身を匿すべき黒暗も無く
 死蔭も無し二三神は人をして審判を受しむるまでに長くその人
 を窺がふに及ばず二四權勢ある者をも査ぶることを須ひずして
 打ほろぼし他の人々を立て之に替たまふ二五かくの如く彼らの
 所爲を知り夜の間に彼らを覆がへしたまへば彼らは乃て滅ぶ二
 六人の觀るところにて彼等を惡人のごとく撃たまふ二七是は彼
 ら背きて之に従はずその道を全たく顧みざるに因る二八かれら
 是のごとくして遂に貧しき者の號呼を彼の許に達らしめ患難者
 の號呼を彼に聽しむ二九かれ平安を賜ふ時には誰か惡しと言ふ
 ことをえんや彼面をかくしたまふ時には誰かこれを見るを得
 んや一國におけるも一人におけるも凡て同じ三〇かくのごとく
 邪曲なる者をして世を治むること無らしめ民の機檻となるこ

となからしむ三一人は宜しく神に申すべし我は已に懲しめられ
 たり再度惡き事を爲し三二わが見ざる所は請ふ我にをしへたま
 へ我もし惡き事を爲たるならば重ねて之をなさじと三三かれ豈
 なんぢの好むごとくに應報をなしたまはんや然るに汝はこれ
 を咎む然ばなんぢ自ら之を選ぶべし我は爲じ汝の知るところ
 を言へ三四心ある人々は我に言ん我に聽ところの智慧ある人々
 は言ん三五ヨブの言ふ所は辨知なしその言詞は明哲からすと三六
 ねがはくはヨブ終まで試みられんことを其は惡き人のごとく
 に應答をなせばなり三七まことに彼は自己の罪に愆を加へわれ
 らの中間にありて手を拍ちかつ言詞を繁くして神に逆らふ
 第三五章一エリフまた答へて曰く二なんぢは言ふ我が義しきは
 神に愈れりとなんぢ之を正しとおもふや三すなはち汝いへらく
 是は我に何の益あらんや罪を犯すに較ぶれば何の愈るところ
 か有んと四われ言詞をもて汝およびなんぢにそへる汝の友等に
 答へん五天を仰ぎて見よ汝の上なる高き空を望め六なんぢ罪
 を犯すとも神に何の害か有ん愆を熾んにすると神に何を爲
 えんや七汝正義かるとも神に何を與るを得んや神なんぢの手
 より何をか受たまはん八なんぢの惡は只なんぢに同じき人を損
 ぜん而已なんぢの善は只人の子を益せんのみ九暴虐の甚だしき
 に因て叫び權勢ある者の腕に壓れて呼はる人々あり一〇然れど
 も一人として我を造れる神は何處にいますやといふ者なし彼
 は人をして夜の中に歌を歌ふに至らしめ一地の獸畜よりも善

くわれらを教へ空の鳥よりも我らを智からしめたまふ者なり
 二 惡き者等の驕傲ぶるに因て斯のごとく人々叫べども應ぶる者
 あらず 三 虚しき語は神かならず之を聽たまはず 全能者これを
 顧みたまはじ 四 汝は我かれを見たてまつらずと言といへども
 審判は神の前にありこの故に汝彼を待べきなり 五 今かれ震怒
 をもて罰することを爲す 罪愆を深く心に留たまはざる（が如く
 なる）に因て 六 ヨブ口を啓きて虚しき事を述べ無知の言語を繁
 くす

第三章一 エリフまた言詞を繼て曰く 二 暫らく我に容せ我なん
 ぢに示すこと有ん 尚神のために言ふべき事あればなり 三 われ廣
 くわが知識を取り我の造化主に正義を歸せんとす 四 わが言語は
 眞實に虚偽ならず 知識の完全き者なんぢの前にあり 五 視よ神は
 權能ある者にましませども何をも貌視たまはず その了知の
 能力は大なり 六 惡しき者を生し存す 艱難者のために審判を行ひ
 たまふ 七 義しき者に目を離さず 位にある王等とともに永遠に
 坐せしめて之を貴くしたまふ 八 もし彼ら鍾索に繋がれ 艱難の繩
 にかかる時は 九 彼らの所行と愆尤とを示してその驕れるをさせ
 一〇 彼らの耳を開きて教を容れしめかつ 惡を離れて歸れよと彼
 らに命じたまふ 二 もし彼ら聽したがひて之に事へなば 繁昌て
 その日を送り 樂しくその年を涉らん 三 若かれら聽したがはず
 ば 刀劍にて亡び 知識を得ずして死なん 三しかれども心の邪曲
 なる者等は 忿怒を蓄はへ 神に縛しめらるるとも 祈ることを爲

ず 一四 かれらは年わかしくして 死亡せ 男娼とその生命をひとしう
 せん 一五 神は 艱難者を 艱難によりて 救ひ之が 耳を 虐遇によりて
 開きたまふ 一六 然ば 神また 汝を 狹きところより 出して 狹からぬ
 廣き所に 移したまふ 一七 今ば 惡人の 鞫罰なんぢの 身に 充り 審判と 公義
 となんぢを 執ふ 一八 なんぢ 忿怒に 誘はれて 嘲笑に 陥らざるや
 う 慎しめよ 收贖の大なるが 爲に 自ら 誤るなけれ 一九 なんぢの
 號叫なんぢを 艱難の中より 出さんや 如何に 力を 盡すとも 所益
 あらじ 二〇 世の 人の その 處より 絶る 其夜を 慕ふなけれ 二 慎し
 て 惡に 傾むくなけれ 汝は 艱難より も 寧ろ之を取ん とせり 三 所
 れ 神は その 權能をもて 大なる 事を 爲したまふ 誰か 能く 彼の ごと
 くに 教晦を 垂んや 三 たれか 彼の ために その 道を 定めし 者あ
 らんや 誰か なんぢは 惡き 事を なせりと 言ふ ことを 得ん 二四 なん
 ぢ 神の 御所爲を 讚歎 ぶる ことを 忘れざれ これ 世の 人の 歌ひ 崇
 むる 所なり 二五 人みな 之を 仰ぎ 觀る 遠き 方より 人これを 視たて
 まつる なり 二六 神は 大なる 者に いまして 我儕 かれを 知たて まつ
 らず その 御年の 數は 計り 知る べからず 二七 かれ 水を 細にして 引
 あげた まへば 霧の中に 滴り 出で 雨となるに 二八 雲これを 降せて
 ひびく 上に 沛然に 灌くなり 二九 たれか 能く 雲の 舒展る 所以 また
 その 幕屋の 響く 所以を 了知んや 三〇 視よ 彼その 光明を 自己の
 周圍に 繞らし また 海の 底をも 蔽ひ たまひ 三 一 これらをもて 民を
 鞫き また 是等をもて 食物を 豊饒に 賜ひ 三 二 電光をもて その 兩手

を包みその電光に命じて敵を撃しめたまふ三その鳴聲かれを
顯はし家畜すらも彼の來ますを知らすなり

第三章一之がためにわが心わななきその處を動き離る二神の
聲の響およびその口より出る轟聲を善く聴け三これを天が下に
放ちまたその電光を地の極にまで至らせたまふ四その後聲あ
りて打響き彼威光の聲を放ちて鳴わたりたまふその御聲聞え
しむるに當りては電光を押へおきたまはず五神奇しくも御聲を
放ちて鳴わたり我儕の知ざる大なる事を行ひたまふ六かれ雪に
むかひて地に降れと命じたまふ雨すなはちその權能の大雨に
も亦しかり七斯かれ一切の人の手を封じたまふ是すべての人に
その御工作を知しめんがためなり八また獸は穴にいりてその洞
に居る九南方の密室より暴風きたり北より寒氣きたる一〇神の
氣吹によりて氷いできたり水の寛狭くせらる一かれ水をもて
雲に搭載せまた電光の雲を遠く散したまふ二是は神の導引に
よりて過る是は彼の命するところを盡く世界の表面に爲んが
ためなり三その之を來らせたまふは或は懲罰のためあるひは
その地のため或は恩恵のためなり四ヨブよ是を聴け立ちて
神の奇妙き工作を考がへよ五神いかに是等に命を傳へその雲
の光明をして輝やかせたまふか汝これを知るや一六なんぢ雲の
平衡知識の全たき者の奇妙き工作を知るや一七南風によりて地
の穩かになる時なんぢの衣服は熱くなるなり一八なんぢ彼と
もに彼の堅くして鑄たる鏡のごとくなる蒼穹を張ることを能せ

んや一九われらが彼に言ふべき事を我らに教へよ我らは暗昧し
て言詞を列ぬること能はざるなり二〇われ語ることありと彼に
告ぐべけんや人あに滅ぼさることを望まんや二一人いは
雲霄に輝やく光明を見ること能はず然れど風きたりて之を
吹清む三北より黄金いできたる神には畏るべき威光あり二三
全能者はわれら測りきはむることを得ず彼は能おほいなる者
にいまし審判をも公義をも扨たまはざるなり二四この故に人々
かれを畏る彼はみづから心に有智とする者をかへりみたまは
ざるなり

第三章一茲にエホバ大風の中よりヨブに答へて宣まはく二
無智の言詞をもて道を暗からしむる此者は誰ぞや三なんぢ腰ひ
きからけて丈夫のごとくせよ我なんぢに問ん汝われに答へよ
四地の基を我が置たりし時なんぢは何處にありしや汝もし
穎悟あらば言へ五なんぢ若知んには誰が度量を定めたりしや誰
が準繩を地の上に張りたりしや六その基は何の上に奠れたりし
やその隅石は誰が置たりしや七かの時には晨星あひとともに歌
ひ神の子等みな歡びて呼はりぬ八海の水ながれ出で胎内より
涌いでし時誰が戸をもて之を閉こめたりしや九かの時我雲をも
て之が衣服となし黒暗をもて之が襦袢となし一〇これに我法度
を定め關および門を設けて二曰く此まででは來るべし此を越べ
からず汝の高浪ここに止まるべしと三なんぢ生れし日より
以來朝にむかひて命を下せし事ありやまた黎明にその所を知

しめ三これをして地の縁を取へて悪き者をその上より振落さ
 しめたりしや四地は變りて土に印したることくに成り 諸の
 物は美はしき衣服のごとくに顯る五また悪人はその光明を奪
 はれ高く擧たる手は折らる六なんぢ海の泉源にいたりしこと
 ありや淵の底を歩みしことありや七死の門なんぢのために開
 けたりしや 汝死蔭の門を見たりしや八なんぢ地の廣を看み
 はめしや 若これを盡く知ば言へ九光明の在る所に往く路は孰
 ぞや 黑暗の在る所は何處ぞや 〇なんぢ之をその境に導びき得
 るやその家の路を知るや 二なんぢ之を知らん 汝はかの時
 すでに生れをり また汝の經たる日の數も多ければなり 三なん
 ぢ雪の庫にいりしや 雪の庫を見しや 三これ我が艱難の時にた
 めに蓄はへ 戰爭および戰鬪の日のために蓄はへ置くものなり 二
 四 光明の發散る道 東風の地に吹わたる所の路は何處ぞや 五誰
 が大雨を灌ぐ水路を開き 雷電の光の過る道を開き 六 人なき地
 にも人なき荒野にも雨を降し 七 荒かつ廢れたる處々を潤ほし
 かつ 若菜蔬を生出しむるや 八 雨に父ありや 露の珠は誰が生る
 者なるや 九 氷は誰が胎より出るや 空の霜は誰が産むところな
 るや 〇 水かたまりて石のごとくに成り 淵の面ごぼる 三 なんぢ
 昴宿の繩索を結びうるや 參宿の繫繩を解うるや 三 なんぢ十
 二宮をその時にしたがひて引いだし得るや また北斗とその
 子星を導びき得るや 三 なんぢ天の常經を知るや 天をして其
 權力を地に施こさしむるや 四 なんぢ聲を雲に擧げ 滂沛の水を

して汝を掩はしむるを得るや 三 五 なんぢ閃電を遣はして往しめ
 なんぢに答へて 我儕は此にありと言しめ得るや 三 六 胸の中の
 智慧は誰が與へし者ぞ 心の内の聰明は誰が授けし者ぞ 三 七 たれ
 か能く智慧をもて雲を數へんや たれか能く天の瓶を傾むけ 三 八
 塵をして一塊に流れあはしめ 土塊をしてあひかたまらしめんや
 三 九 なんぢ牝獅子のために食物を獵や また小獅子の食氣を滿す
 や 四 〇 その洞穴に伏し 森の中に隠れ 何がふ時なんぢこの事を爲
 うるや 四 一 また鴉の子神にむかひて 呼はり 食物なくして徘徊る
 時 鴉に餌を與ふる者は誰ぞや

第三九章 一 なんぢ岩間の山羊が子を産む時をしるや また鹿の
 産に臨むを見しや 二 なんぢ是等の在胎の月を數へつるや また
 是等が産む時を知るや 三 これらは身を鞠めて子を産みその痛苦
 を出す 四 またその子は強くなりて野に育ち 出ゆきて 再びその
 親にかへらず 五 誰が野驢馬を放ちて自由にしや 誰が野驢馬の
 繫繩を解しや 六 われ野をその家となし 荒野をその住所となせり
 七 是は邑の喧鬧を賤しめ 馭者の號呼を聽いれず 八 山を走まは
 りて草を食ひ 各種の青き物を尋ぬ 九 兕肯て汝に事へ なんぢの
 飼草槽の傍にとどまらんや 〇 なんぢ兕に綱附て 阡陌にあるか
 せ得んや 是めに汝にしたがひて 谷に馬鉞を牽んや 一 其の力お
 ほいなればとて 汝これに恃まんや またなんぢの工事をこれに
 任せんや 二 なんぢこれにたよりて 己が穀物を運びかへらせ
 を 打禾場にあつめしめんや 三 駝鳥は歡然にその翼を鼓ふ 然

どもその羽と毛とはあに鶴にしかんや。四はその卵を土の中に棄おきこれを砂の中にて暖たまらしめ。五足にてその漬さるべきと野の獸のこれを踐むべきを思はず。六これはその子に情なくして宛然おのれの子ならざるが如くしその劬勞の空しくなるも繫念とこころ無し。七是は神これに智慧を授けず穎悟を與へざるが故なり。八その身をおこして走るにおいては馬をもその騎手をも嘲けるべし。九なんぢ馬に力を與へしやその頸に勇ましき鬣を粧ひしや。二〇なんぢ之を蝗蟲のごとく飛しむるやその嘶なく聲の響は畏るべし。二一谷を脚爬て力に誇り自ら進みて兵士に向ふ三懼るることを笑ひて驚ろくところ無く。劍にむかふとも退ぞかす。三二矢筒その上に鳴り鎗に矛あひきらめく。四猛りつ狂ひつ地を一呑にし。喇叭の聲鳴わたるも立どまる事なし。五喇叭の鳴ごとにハハハと言ひ遠方より戰鬪を嗅つけ。將帥の大聲および呐喊聲を聞し。六鷹の飛かけりその羽翼を舒て南に向ふは豈なんぢの智慧によるならんや。七鷲の翔のほり高き處に巢を營なむは豈なんぢの命令に依んや。八これは岩の上に住所を構へ岩の尖所または峻險き所に居り。九其處よりして攫むべき物をつかがふその目のおよぶところ遠し。三〇その子等もまた血を吸ふ。凡そ殺されし者のあるところには是そこに在り。

第四〇章一エホバまたヨブに對へて言たまはく。二非難する者エホバと爭はんとするや。神と論する者これに答ふべし。三ヨブ是に

おいてエホバに答へて曰く。四嗚呼われは賤しき者なり。何となんぢに答へまつらんや。唯手をわが口に當んのみ。五われ已に一度言たり。復いはじ已に再度せり。重ねて述じ。六是に於てエホバまた大風の中よりヨブに應へて言たまはく。七なんぢ腰ひきからげて丈夫のごとくせよ。我なんぢに問んなんぢ我にこたへよ。八なんぢ我審判を廢んとするや。我を非として自身を是とせんとするや。九なんぢ神のごとき腕ありや。神のごとき聲をもて轟きわたらんや。一〇さればなんぢ威光と尊貴をもて自ら飾り。榮光と華美とをもて身に纏へ。二なんぢの溢るる震怒を洩し。高ぶる者を視とめて之をことごとく卑くせよ。三すなはち高ぶる者を見てこれを盡く鞠ませ。また惡人を立所に踐つけ。四これを塵の中に埋め。これが面を隠れたる處に閉こめよ。五さらば我もなんぢを讚てなんぢの右の手なんぢを救ひ得ると爲ん。六今なんぢ我がなんぢとともに造りたりし河馬を視よ。是は牛のごとく草を食ふ。七觀よその力は腰にあり。その勢力は腹の筋にあり。八その尾の搖く様は香柏のごとく。その腿の筋は彼此に盤互ふ。九その骨は銅の管のごとく。その肋骨は鐵の棒のごとし。一〇これは神の工の第一なる者にして之を造りし者これに劍を賦けたり。二〇山もこれがために食物を産出し。もろもろの野獸そこに遊ぶ。三〇これは蓮の樹の下に臥し。葦蘆の中または沼の裏に隠れる。三二蓮の樹その蔭をもてこれを覆ひ。また河の柳これを環りかこむ。三三たとひ河荒くなるとも驚ろかず。ヨルダンその口に注ぎかかるも惶て

ず二四その目の前にて誰か之を執ふるを得ん誰か縲をその鼻に貫ぬくを得ん

第四章一なんぢ鉤をもて鱈を釣いだすことを得んやその舌を糸にひきかくることを得んや二なんぢ葦の繩をその鼻に通しまた鉤をその鱈に衝とほし得んや三是あに頻になんぢに願ふことをせんや 柔かになんぢに言談んや四あに汝と契約を爲んやなんぢこれを執て永く僕と爲しおくを得んや五なんぢ鳥と戯むる如くこれとたはむれまた汝の婦人等のために之を繋ぎおくを得んや六また漁夫の社會これを商貨と爲して商賣人の中間に分たんや七なんぢ漁叉をもてその皮に滿し魚矛をもてその頭を衝とほし得んや八手をこれに下し見よ然はその戰鬥をおぼえて再びこれを爲さるべし九視よその望は虚し之を見てすら倒るるに非ずや一何人も之に激する勇氣あるなし然ば誰かわが前に立つる者あらんや二誰か先に我に與へしところありて我をして之に酬いしめんとする者あらん 普天の下にある者はことごとく我有なり二我また彼者の肢體とその著るしき力とその美はしき身の構造とを言では措けし三誰かその外甲を剥ん誰かその雙鰭の間に入ん四誰かその面の戸を開きえんやその周圍の齒は畏るべし五その並列る鱗甲は之が誇るところその相闘たる様は堅く封じたるがごとく六此と彼とあひ接きて風もその中間に在るべからず七一々あひ連なり堅く膠て離すことを得ず八 噫すれば即はち光發すその目は曙光の眼瞼(を開く)

に似たり一九その口よりは炬火いで火花發し二〇その鼻の孔よりは煙いできたりて宛然葦を焚く釜のごとし二一その氣息は炭火を熱し火燄その口より出づ二三力氣その頸に宿る懼る者その前に彷徨まよふ三その肉の片は密に相連なり堅く身に着て動かす可らず二四その心の堅硬ごと石のごとくその堅硬こと下磨のごとし二五その身を興す時は勇士も戰慄き恐怖によりて狼狽まどふ三六劍をもて之を撃とも利かず 鎗も矢も漁叉も用ふるところ無し三七是は鐵を見ること稿のごとくし銅を見ること朽木のごとくす三八弓箭もこれを逃しむること能はず 投石機の石も稿屑と見做る二九棒も是には稿屑と見ゆ鎗の閉めくを是は笑ふ三〇その下腹には瓦礫の碎片を連ね泥の上に麥打車を引く三十一淵をして鼎のごとく沸かへらしめ海をして香油の釜のごとくならしめ三二己が後に光る道を遺せば淵は白髪をいただけるかと疑がはる三三地の上には是と並ぶ者なし是は恐怖なき身に造られたり四是は一切の高大なる者を輕視す 誠に諸の誇り高ぶる者の王たるなり

第四章二 ヨブ是に於てエホバに答へて曰く二 我知る汝は一切の事をなすを得たまふまた如何なる意志にても成あたはざる無し三無知をもて道を蔽ふ者は誰ぞや斯われは自ら了解らざる事を言ひ 自ら知ざる測り難き事を述たり四請ふ聽たまへ我言ふところあらん 我なんぢに問まつらん 我に答へたまへ五われ汝の事を耳にて聞ぬたりしが今は目をもて汝を見たてまつる六

是をもて我みづから恨み塵灰の中に悔ゆ七エホバ是等の言語
 をヨブに語りたまひて後エホバ、テマン人エリパズに言たまひ
 けるは我なんぢと汝の二人の友を怒る其はなんぢらが我に關
 て言述べたるところはわが僕ヨブの言たることごとく正當
 からざればなり八然ば汝ら牡牛七頭牡羊七頭を取てわが僕ヨ
 ブに至り汝らの身のために燔祭を獻げよわが僕ヨブなんぢら
 のために祈らんわれかれを嘉納べければ之によりて汝らの愚
 を罰せざらん汝らの我について言述べたるところは我僕ヨブの
 言たることごとく正當からざればなり九是においてテマン人
 エリパズ、シユヒ人ビルダデ、ナアマ人ソバル往てエホバの自己
 に宣まひしごとく爲ければエホバすなはちヨブを嘉納たまへり
 一〇ヨブその友のために祈れる時エホバ、ヨブの艱難をときて
 舊に復ししかしてエホバつひにヨブの所有物を二倍に増たまへ
 り二是において彼の諸の兄弟諸の姉妹およびその舊相識る
 者等ことごとく來りて彼とともにその家にて飲食を爲しかつエ
 ホバの彼に降したまひし一切の災難につきて彼をいたはり慰さ
 めまた各金一ケセタと金の環一箇を之に贈れり三エホバか
 くのごとくヨブをめぐみてその終を初よりも善したまへり即
 ち彼は綿羊一萬四千匹駱駝六千匹牛一千頭牝驢馬一千匹を
 有り三また男子七人女子三人ありき四かれその第一の女をエ
 ミマと名け第二をケジアと名け第三をケレンハツブクと名け
 たり五全國の中にてヨブの女子等ほど美しき婦人は見えざり

きその父之にその兄弟等とおなじく産業をあたへたり一六この
 後ヨブは百四十年いきながらへてその子その孫と四代までを
 見たり一七かくヨブは年老い日滿て死たりき